

よみがえる25年前

1988年
6、7月

これは今から25年前を記憶や資料をたよりにひも解いてみようとする企画です

◆オーリンゲン大会参加記

O-JAPAN 59号に掲載された京葉 OLC の田中徹さんの報告の一部を掲載させていただき、当時のオーリンゲンの様子を感じていただければと思います。

日本のオリエンティアにとって、北欧のオリエンテリングの代名詞ともいえるオーリンゲン大会は、今年スウェーデン中部のサンズバル市を大会センターに開催された。ここは現世界チャンピオンで地元オリエンティアのほこりアリア・ハンヌスの出身地である【スウェーデンでも「地元のほこり」とまではいかないのか。(マガジン編集者のつぶやき)】。

スウェーデン最大のOイベントであるこの大会は1965年の第1回大会以来20数年歴史を持ち、第1回大会が156名の参加者しかなかったことからすれば近年の2万人の参加者数【編集者調査では1983年、1985年と2008年に2万人を超えた】は北欧におけるOLの隆盛を反映しているものだろう。【編集者調査では最近では2008年を除くと12000人から16000人の年が多い】

日本からの参加者も70年代中ごろから始まったが、当時のJOLCのツアーにごく限られた人が団体行動をしていたのに比べ、今回の学生連盟、むさしのOLC、京葉OLCなど、独自にエントリーを行って参加するほど、より身近になってきたようにおもう。

日本からの参加者は40名。日本を代表するベテラン小笠原陽太郎さんはH45AK(ショートクラス)で常にトップから遅れることわずか数分のエキサイティングなレースを展開したが、中間日のミスがたたってしまい、大変残念であった。

過去6回の世界選手権代表である山岸倫也さんは大会で80人しか出場できないH21Eにチャレンジし、地元スウェーデンランキング上位者、ヨーロッパ諸国のトップランナーの中で予想通り苦戦となったが、来年に迫った世界選手権の予選通過に向けて感触をつかんだようである。H21AL、D21AL(事実上のエリート)に日本のナショナルチームの3人が挑んだものの、北欧の壁は厚く、後半に至ってタイムオーバーになってしまい、いまだに残された課題は多い。AK(ショート)クラス、Bクラスに参加した学生オリエンティアにとっても上位ははるかに遠く、タイムオーバーになってしまった人が多かった。しかし、ヨーロッパのOLを身を以て知った彼らの帰国後の発展を期待したい。

大会の運営は地元のクラブを中心に5日間の競技をそれぞれ担当。マスマススポーツ化した故にレベルが低下したといわれ続けた昨年のプロマッパーの導入に続き、今年も地元のプロによるものでレベルの維持向上を図っている。

閉会式には最大の賞賛の中、各クラスの勝者の表彰、大会旗の次期開催地への伝達、エリート6クラスの勝者としてのVIPとしてのとりなしなどが整然と行われ、オーリンゲンは今もなお、多分これからもわれわれの憧れとして、教師として位置にあることを実感した。

時の話題

6月6日 齋藤祐樹(プロ野球) 誕生

7月6日 東八郎(東貴博の父) 死去

7月30日 北陸自動車道完成